

群 教 セ	H01 - 01
	平 26. 254 集
	幼児教育

高齢者との関わりを楽しむ幼児の育成

—訪問に「ふれあい遊び」と「お話タイム」を取り入れて—

特別研修員 酒井 芽久美

I 研究テーマ設定の理由

幼児を取り巻く現状は核家族化や地域社会においての人間関係の希薄化が進み、幼児が成長過程で「人と関わる力」を自然に身に付けていく機会が少なくなっている。本園の幼児の実態を見ると、ほぼ全員が核家族で、幼児は祖父母に対する好感を持っているものの、頻繁に関わることは困難な状況にある。高齢者をはじめ地域の人々など自分の生活に関係の深い様々な人と触れ合うことで、幼児は自分と違う人の存在に気付き、人と関わる楽しさを味わえると考え。園の保育の一環として、地域の高齢者施設に出向き、高齢者と触れ合う経験を積み重ねていくことは、祖父母と接する場面に近い体験ができ、幼児にとっては精神的な安らぎの場を得たり、社会生活を体験したりできる場として有意義であると考え。

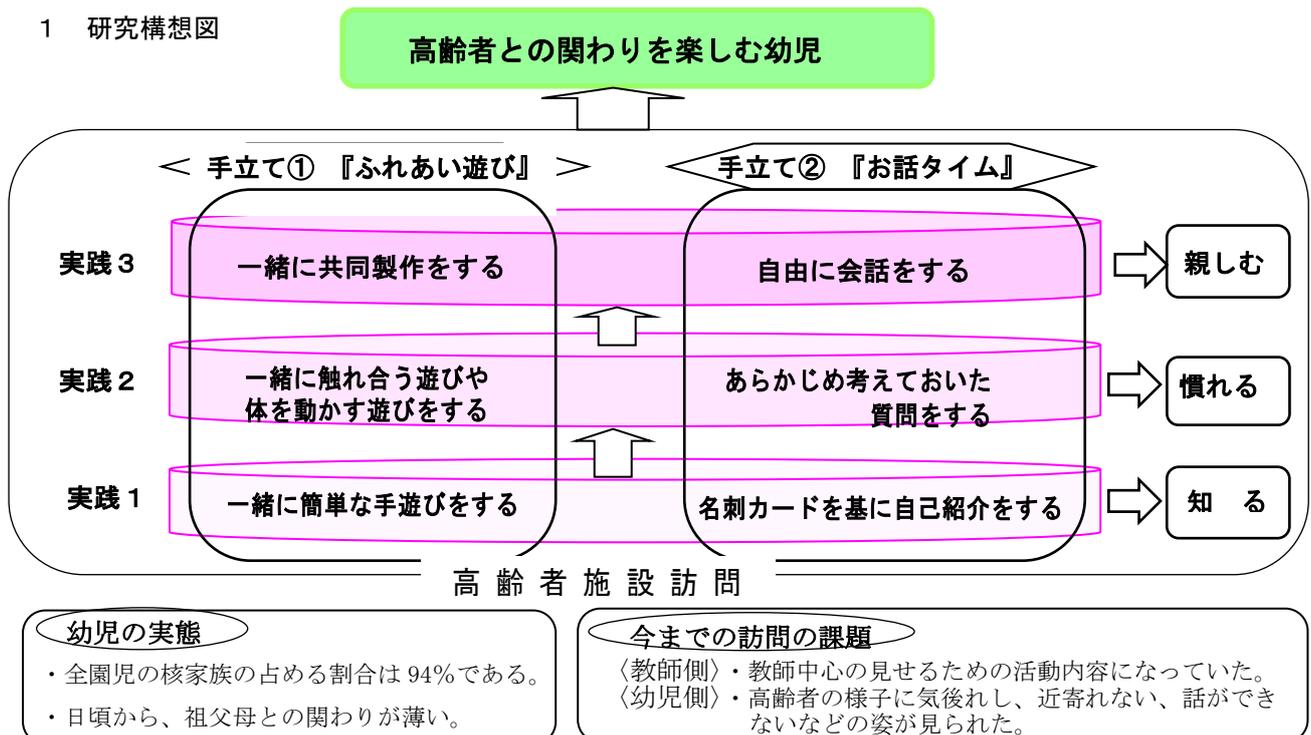
本園周辺には高齢者施設があり、毎年、数回の訪問をしてきている。訪問の際には、興味を持って参加するものの、普段、関わりが少ない年齢の人たちの雰囲気によって圧倒されてしまったり、自分の思いを表現できなかったりする幼児がいた。また、教師からの投げ掛けで歌や踊りを披露することが中心のイベント的な活動になってしまい、関わりを楽しむまでには至らなかったことが反省される。

人との関わりを楽しむためには、スキンシップをとることや、言葉で思いを伝え合って他者の情報を得ることが必要である。また、スムーズに関わり合いが持てるように関わる経験を重ねることが大切である。そこで、訪問の際にスキンシップを図る「ふれあい遊び」と言葉で伝え合う「お話タイム」を取り入れる。そして、段階的に内容を考え、複数日の訪問を設定する。このような訪問を重ねる中で、幼児は高齢者との触れ合う楽しさを味わい、高齢者との関わりを楽しむようになることを考える。

以上のことから、本テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 保育改善に向けた手立て

高齢者施設訪問を年間3回行い高齢者と関われるように「ふれあい遊び」と「お話タイム」を設定する。「ふれあい遊び」では、手遊び、簡単なゲーム、共同製作などを取り入れる。回をおうごとに、触れる部分を多くするとともに、高齢者と幼児が共通の目的を持って協力しながら進めていけるような内容にしていく。「お話タイム」では、話すきっかけとなる名刺を活用する、質問内容をあらかじめ考えておく、自由に話すなど、段階的に高齢者とのコミュニケーションをとりやすい方法を取り入れる。このようにして徐々に自分の思いを伝えたり、相手の話を聞いたりして楽しめるようにしていきたいと考えた。

1回目と2回目の訪問で、以下の手立てで実践を試みた。

(1) <実践1における手立て> 「〇〇園のおじいちゃん、おばあちゃんに会いに行こう①」

○「ふれあい遊び」・・・高齢者とペアになり、一緒に遊ぶことで高齢者の存在を知るようにする。

- ・ペアになり、簡単な手遊び（カタツムリ、カエルのうた）をする。
- ・手作りのプレゼントをする。

○「お話タイム」・・・自己紹介をし合い情報を得ることで高齢者の存在に気付けるようにする。

- ・名刺カードを基に自己紹介をする。

※事前に名刺カードを作って自己紹介をする練習をしたり、プレゼントを作ったりする。

(2) <実践2における手立て> 「〇〇園のおじいちゃん、おばあちゃんに会いに行こう②」

○「ふれあい遊び」・・・多くの高齢者と触れ合う遊びや体を動かす遊びを取り入れ、関わり慣れていけるようにする。

- ・高齢者とペアになり、一緒に「むすんでひらいて」の手遊びをする。
- ・高齢者とタッチをする遊びで全員の高齢者と関われるようにする。
- ・ペアになり紙風船を使って風船つきをする。
- ・「げんこつやまのためきさん」の歌に合わせて高齢者に肩たたきをする。

○「お話タイム」・・・質問をすることで話題が広がり、高齢者と話することに慣れていけるようにする。

- ・自己紹介の後、質問をする場を設定する。

※事前に聞きたいことを考えさせ、自分の言葉で聞けるようにする。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 訪問にあたって、事前の打ち合わせで活動のねらいや内容、高齢者の動作の可動範囲など確認しながら話し合ったことで、段階的、発展的な内容を決めることができ、交流を充実させることができた。
- 高齢者と触れ合い一緒に遊ぶことと、自分なりの言葉で伝えることを活動の中心として、段階的な内容で進めてきたことで、幼児が高齢者の思いを受け止めたり、相手のことを自分のこととして受け止めたり、手を貸したり、動きに合わせて対応しようとする姿が見られるようになった。
- 高齢者と実際に触れ合ったり、思いを伝え合ったりしたことで、高齢者との関わりを持つことに抵抗がなくなり、自ら関わろうとする幼児が増えた。

2 課題

- 高齢者施設の方との打ち合わせを更に充実させ、高齢者にとっても有意義な内容にする必要がある。

3 提言

- 高齢者施設訪問の中で直接触れ合ったり会話したりすることは、高齢者との関わりを楽しむ幼児を育てるために有効である。事前打ち合わせの中で双方の様子を具体的に話し合い、幼児にとっても高齢者にとっても有意義な内容にすることが大切である。

＜保育実践＞

実践 1

1 活動名 「〇〇園のおじいちゃん、おばあちゃんに会いに行こう ①」（5歳児・7月）

2 本活動について

本園は、周辺に文化的施設に恵まれた環境の中にある。その施設の一つである高齢者施設は園から歩いて15分程度の場所にあり、訪問しやすい環境にある。また、高齢者と直接関われる場を設定することにより幼児は、親しみを持ち、人と関わることの楽しさや喜びを味わうなどの経験を行うことができる。さらに、高齢者から自分がいることを喜んでもらえることで、自分が役に立つ人間であることが実感できる体験になると考える。

昨年度の訪問で、歌を披露したり、全体または高齢者とペアになり簡単な手遊びをしたりする経験をしてきている。今回の訪問では、高齢者への親しみが持てるように「ふれあい遊び」の中で高齢者と一緒に手遊びをしたり、「お話タイム」の中で自己紹介をしたりする活動を取り入れ、高齢者と直接関われるようにしたいと考えた。

3 保育の実際

事前の保育の中で、昨年度の訪問時の写真を見せ、昨年度は歌を披露したことや一緒に手遊びをしたことなどを投げかけた。幼児から「おじいちゃんたちに歌を歌ったよね」「恥ずかしかったよね」などの声が聞かれた。今年は、年中時に出会った高齢者が子どもたちの訪問を心待ちにしていることや、一緒に手遊びなどをすることを伝え、「ふれあい遊び」や「お話タイム」で進んで関われるよう言葉をかけた。すると、数名の幼児から「早く会いたい」「前に話した人がいるかな・・・」などと訪問を心待ちにする声が聞かれた。訪問前に、数回にわたって、高齢者と一緒に行う手遊びを練習したり、自分の好きな物を描いた名刺カードを基にして自己紹介をするシミュレーションをしたりした。

A児は、新入園児で高齢者施設への訪問は初めての経験であり、知らない人と会うことに緊張感している様子であった。また、B児は、名刺カード作りの際に、自分で名前を書き、好きな物をあれこれと考えて進んで描く様子が見られたが、話すこととなると「ハンバーグが好きなんだけど・・・。どうやって、話したらいいかなあ」と言い、少し不安そうな表情を浮かべていた。

手立て①「ふれあい遊び」

- ・簡単な手遊び（カタツムリ、カエルのうた）をする。
- ・手作りのプレゼントをする。

・高齢者の方たちに拍手で迎えられ、挨拶をした後、高齢者とペアになり簡単な手遊びをした（図1）。ほとんどの幼児が自分とペアになる高齢者を見つけて向き合い、教師の歌に合わせて手遊びをしようとする姿が見られた。
＜A児の様子＞

・A児は、部屋に入る前は硬い表情をしていた。教師が、A児の背中に手を添えて入室したが、高齢者が拍手で迎え入れてくれると硬さがとれ、高齢者の方を見て、全体での挨拶をすることができた。

・高齢者とペアになる際には、自分から近寄っていくことを躊躇している様子が見られた。そこで、活発そうな高齢者のもとへA児を誘導する。不安そうな表情は変わらないが、手遊びが始まると、高齢者の方から「かわいい手だね」などと話され、にこやかな表情で微笑みかけられたことで、伏し目がちなA児も高齢者の笑顔に対応するように、笑顔が見られるようになった。その後は、一緒に歌いながら手遊びをする様子が見られた（図2）。

・プレゼントを渡す際に高齢者から「絵が上手だね」と言われ、嬉しそうな表情で相手を見て「ありがとう」と自分から言うことができた。

【教師の見取り】



図1 挨拶をする様子



図2 手遊びの様子

A児にとって実際に会っていない高齢者をイメージすることは困難であり話すことに緊張感や抵抗を感じていたが、高齢者が拍手で迎え入れてくれたことで、自分たちを受け入れてくれようとしていることに嬉しさを感じたようだ。自分も高齢者の存在を受け入れられたことで、自然と笑顔が見られるようになったのではないかと考えた。

手立て②「お話タイム」・自分の名前と好きな物などを描いた名刺カードを基に自己紹介する。

・お話タイムでは、ほとんどの幼児が持参した名刺カードを見ながら「名前は〇〇です」「食べ物は〇〇が好きです」など自分の言葉で伝えようとしていた。

< B児の様子 >

・B児は、うつむいてしまってなかなか話し出せないでいた。教師が、「ここに書いてあるよね」と名刺カードの存在を知らせ、一緒に声を合わせて自己紹介をした。高齢者は、うなずきながら真剣に聞いてくれたり、高齢者の方から「私は、お手玉の遊びが好きなんだよ。お手玉って知ってるかい？」などとB児の様子に合わせて、話を膨らませてくれた。B児は少しずつ高齢者の側に寄って顔を見てうなずいたり真剣に話を聞いたりしてういた(図3)。



図3 お話タイムの様子

・最後に高齢者からコマのプレゼントがあったが、B児は予想していなかった高齢者からのコマのプレゼントに驚き、魅力的なコマの存在に嬉しくなり、高齢者と向き合い、顔を見て「ありがとう」と伝えることができた。

【教師の見取り】

・名刺が話題の拠り所となり、高齢者との会話のきっかけが作れたようだ。高齢者が温かくうなずきながら、真剣に聞いてくれたりしたことがB児にも伝わり、顔を見て話せるようになったと考える。

・コマをもらった際には、高齢者が自分のためにしてくれたことを感じて嬉しい気持ちが言葉に表れたのだろう。

< 事後の活動 >

・園に戻ると、高齢者からプレゼントされた手作りのコマを早速皆で回し始めた。コマ回しをしながら、「おじいちゃんの手は、しわしわだったね」「心配だったけど、話せたよ」「ギュッって抱きしめてもらったよ」「おばあちゃん握手したら喜んでたよ」「来てくれてうれしいよって言ってくれたよ」など、口々に伝え合う姿が見られた。



図4 コマで遊ぶ様子

【教師の見取り】

・訪問後、子どもたちが嬉しさや喜びを表現していた。優しくしてもらったことに加え、高齢者の喜びを感じ、それを自分の喜びとし受け止めることができたからと考える。

4 考察

- 高齢者の方たちが拍手で迎えてくれたことで、全体の緊張感がほぐれ、幼児が受け入れられているという安心感を持つきっかけとなったと考える。また、「ふれ合い遊び」や「お話タイム」を取り入れたことで、徐々に高齢者との関わりを持てるようになった。
- 「ふれあい遊び」については、幼児は事前に練習しておいたり、高齢者の方にも耳慣れている歌を使用したり、徐々に触れ合う部分を多くしたりしたことで、幼児も高齢者もスムーズに活動することができ、効果的であった。しかし、全体の高齢者にいきわたるような幼児の配置や高齢者の手の動きを十分に把握できずに、うまくいかない手遊びもあつたりしたことが反省として挙げられる。
- 「お話タイム」では、名刺を使用したことが、高齢者との話のきっかけとなり、有効であった。ほとんどの幼児は、聞かれたことは自分の言葉でしっかり答えようとすることができたが、聞かれたこと以外の話はうまくできないまま時間が過ぎてしまう様子も見られたので、自分から話し出せるような手立てが必要であったと感じた。

実践2

1 活動名 「〇〇園のおじいちゃん、おばあちゃんに会いに行こう ②」（5歳児・9月）

2 本活動について

前回の訪問では、「ふれあい遊び」や「お話タイム」を通して、幼児は高齢者の存在に気付き、次第に交流することに慣れていった様子が見られた。今回の「ふれあい遊び」では、前回同様スキンシップを多く取り入れた内容の手遊びを行うとともに、より多くの高齢者と触れ合えるような遊びや、体を動かす遊びを取り入れ、さらにコミュニケーションをとれるようにしていきたい。また「お話タイム」では、事前に聞きたいことを考えておくことで、自分から話し出すきっかけを作り、話題が広がるように準備しておきたい。これらの活動により、交流が楽しい経験となり、相手に親近感を持つようになるであろうと考えた。

3 保育の実際

事前の保育の中で、前回の活動を話題にするとともに、高齢者施設の方たちの期待を込めたメッセージを幼児に伝えた。前回の訪問の楽しかったことを思い出し、次回の訪問への期待が出てきたところで高齢者に聞きたいことを3つ程度考えるように促した。また、「ふれあい遊び」の内容として、高齢者の知っている童謡を考え幼児と練習したり、紙風船で遊ぶことを伝えたりした。このような活動の中で、幼児は、前回一緒に遊んだ高齢者を意識し、訪問への期待を高めていった。「前に話したおばあちゃんと一緒にいいな。抱っこしてもらったしさ」「また、喜んでくれるかな」と前回の訪問で得た嬉しい経験を思い出し、訪問することを心待ちにしている様子が見られるようになった。

C児については、前回の手遊びの際には、不安からか何度も教師を見て、やり方を確認する様子が見られた。日頃から、自分から話し出すことは少なく、前回のお話タイムでは、恥ずかしそうにうなづく程度の受け答えであった。

手立て①「ふれあい遊び」

- ・触れ合う遊び（タッチ遊び、肩たたき）をして、高齢者とスキンシップを図る。
- ・身体を動かす遊び、紙風船つきをする。

・高齢者の並び方が円形になるように環境を構成しておき、幼児が様々な高齢者と関わられるようにした。高齢者や友達の見渡せることで、前回よりも和やかな雰囲気であった。

< C児の様子 >

・前回一緒に遊んだ高齢者の存在を確認すると、小さく手を振る仕草をする様子が見られた。タッチ遊びで高齢者にタッチする時に、前回の高齢者に自分から進んで手を差し出す様子が見られた（図5）。

～紙風船遊び～

・高齢者と紙風船を叩きあうが、なかなか続かないため、自然と高齢者と近寄ったり、離れたりしうまく続くように積極的に動こうとする。

・高齢者と一緒に「あ～、落ちちゃった！」「10回まで続けよう！」「頑張れ！」など目的を持って声をかけ合っていた。

～肩たたき～

C・・・C児 高・・・高齢者

高：「気持ちいいよ」

C：嬉しそうな笑顔で高齢者の反応を確認しながら肩をたたく（図6）。

高：「肩を叩いてもらって気持ち良かったよ」

C：「ありがとう」高齢者の肩越しから身を乗り出して言葉をかける。

【教師の見取り】

・前回ペアになった高齢者に自分の存在をアピールし、自らコミュニケーションをとろうとしている姿から、前回よりも親近感を持って関わろうとしていると捉えた。



図5 タッチ遊びの様子



図6 肩たたきの様子

- ・「ふれあい遊び」では、互いに遊びを楽しもうとすることで、自分がどのように動けばよいか考え、自然と言葉を交わしたり、笑顔を見せ合ったりするようになったと捉えた。
- ・肩たたきをして「気持ちいいよ」と言ってもらった嬉しい気持ちから、思わず自分の身を乗り出して言葉をかけたのだろうと捉える。

手立て②「お話タイム」・ペアになった高齢者に自己紹介後、あらかじめ考えてきた質問をする。

ほとんどの幼児が、あらかじめ考えてきた質問を基に高齢者に話しかけようとする。

< C児の様子 > C・・・C児 高・・・高齢者

C：「何の食べ物が好きですか？」

高：「煮物とか好きだな」「Cちゃんは、何が好き？」

C：「私は、リンゴ」

高：「何で好きなの？」

C：「あのね、青森におじいちゃんとおばあちゃんがいる。
リンゴを、送ってきてくれるんだ！」

高：「へえ、いいね～」

・自分で作ったプレゼントを渡す際には、

C：「一緒に遊んでくれて、ありがとう」

高：「上手に描いてあるね。ありがとう」

C：帰り際には手を振り続け、「また来るからね～！」と言葉をかけた（図7）。



図7 さようならの挨拶の様子

【教師の見取り】

・幼児と高齢者が共通の話題を見出し、それをもとに話すことを楽しみ、相手の反応を見ながら、会話の幅を広げられたようだ。自分の気持ちが通じ共感し合えたことで嬉しさが増し、思わず言葉が出たと考える。

< 事後の活動 >

・友達と口々に「楽しかったね～！」「あのね、私が話したおばあちゃんは90歳なんだって！」「今度、また一緒に紙風船遊びしたいな～」「また、あのおばあちゃんと遊びたいな」など経験したことを自分の言葉で伝え合っていた。

【教師の見取り】

・帰園後も、楽しかったことや分かったことなどについて友だちと会話を楽しんでおり、高齢者に対する愛着を感じたり、身近な存在として感じたりしていると考えられる。

4 考察

- 「ふれあい遊び」で、紙風船遊びで楽しさを共感できる遊びや全員に触れ合えるタッチ遊び等を取り入れたことにより、自然に感嘆の声や共感の声があがったり、言葉を交わしたりすることができた。このような姿は、楽しさを共感することで、関わることに慣れてきた姿と考える。
- 「お話タイム」では、自分で聞きたいことを考えて伝え、高齢者の方との話題を見だし、聞かれたことはしっかり答えようとする幼児が多かった。これは、一回目で高齢者の様子を知った経験を土台にして話すことに抵抗が薄れ、慣れてきたためと考える。
- 幼稚園に戻ると高齢者と話した内容を嬉しそうに伝え合い、次回を期待する様子も見られた。幼児の心に芽生えた高齢者と関わる楽しさや親しみの気持ちが、回を重ねることにより、高まっていったと考える。段階的に内容を考え、訪問を重ねたことの成果と考える。
しかし、聴覚の弱い高齢者に対しては、なかなか自分の思いが伝わらずに困惑してしまう幼児も見られ、次回への課題となった。